

# 日本語アスペクト形式「ている」の習得過程の中間 言語分析 - 中国語母語話者を対象に -

著者	簡 卉?
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	国博第115号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/51120">http://hdl.handle.net/10097/51120</a>

CHEN  
簡

HUI  
卉

WEN  
雯

学位の種類 博士（国際文化）

学位記番号 国博 第 115 号

学位授与年月日 平成22年 3 月25日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期 3 年の課程）  
国際文化交流論専攻

学位論文題目 日本語アスペクト形式「ている」の習得過程の中間言語分析  
－中国語母語話者を対象に－

論文審査委員 （主査）

准教授	中 村	渉	教 授	吉 本	啓
			准教授	北 原	良 夫
			教 授	上 原	聡

## 論文内容の要旨

### 1. 研究背景と目的

日本語アスペクト形式の 1 つである「ている」は、前に接続する動詞の語彙的意味や「ている」の意味や文脈などにより多様な用法を持つ。そのため、日本語学習者が学ぶ際に負担が大きく、成人の第 2 言語学習者にとっても、習得が難しいと言われている（Shirai 1998）。「ている」の習得研究では、「ている」の諸用法の習得順序、動詞の語彙的アスペクト、文法的アスペクト、母語からの影響、文末と連体修飾節の統語環境など、さまざまな側面から行われており、習得の困難になる要因について説明を試みている（黒野 1995； Shirai 2002； 小山 2003； 菅谷 2004； 許 2005； 塩川 2007）。

しかし、「ている」の習得に影響を与える要因は様々であり、各々の要因が「ている」の習得の難易度にどの程度深く関わっているかはまだ解明されていない。1 つの要因のみに注目して考察を行うと、その要因を過大評価又は過小評価してしまう危険性があるので、複数の要因を同時に検討する必要があるが、複数の要因を同時に検討した研究はまだない。各々要因が「ている」の習得に

どの程度深く影響しているかを明らかにすることで、中間言語の変化のプロセスの解明に繋がる上、「ている」の指導と研究への貢献が大きいと考えられる。

また、収集資料の性質の違いが研究の結果に影響を与える可能性があることが指摘されているが (Shibata 1999; Sugaya & Shirai 2007)、「ている」の習得に関するこれまでの研究は発話データと文法テストに基づいたものが殆どで、日本語学習者が書いた文章の言語形式に基づいた研究はまだない。「ている」の習得の全体像を把握するためには、書き言葉のデータの検討も不可欠である。

さらに、「ている」の学習の難易度は学習年数によりどのように移り変わるのか、学習者の言語体系である中間言語の変化と再構築の過程についても、まだ明らかにされていない。学習者の習得過程を解明し、習得に関わる要因を検討するために、特定の学習者を研究対象として、長期間にわたって縦断的研究を行う必要がある。横断的研究はレベル別に調査を行って大量の資料が収集できるが、被験者が異なっているため、正確な発達過程を示すことは難しい。しかし、今までの「ている」に関する習得研究は、概ね横断的研究によるものであり、縦断的研究によるものは非常に少なく、更に、書き言葉を調査資料とした縦断的研究は全くと言って良いほど見られない。

そこで、本研究は、台湾人日本語学習者の作文における「ている」の習得に焦点を当てて、横断的研究及び縦断的研究を行い、「ている」習得に影響を与える要因、学習者の中間言語の形成過程及び形成に関わる要因を探ることを目的とする。具体的に (1) に示した 4 点を研究課題とした。

- (1) a. 「ている」の習得の難易度を左右すると考えられる要因は、どれだけ「ている」に影響を与えているのか、複数の要因を同時に検討して明らかにする。
- b. 「ている」の習得に深く関わっている要因は学習者の習熟度によりどう変化するかを検討する。
- c. 「ている」の習得に深く関わっている要因に焦点を当てて、縦断調査により、学習者の習得過程および中間言語の変化と再構築の過程を記述する。
- d. 中間言語の形成に関する要因について、横断的研究を行い、得られた言語資料を統計分析によって検証する。

本研究の研究目的は、学習者が産出された言語資料を研究するとともに、発達し変化する学習者の言語体系を探ることである。従って、本稿は Selinker (1972) が主張した「学習の各時点における言語体系と言語体系の連続体」を「中間言語」と規定して研究を進めた。具体的に、本稿では「中間言語」を次の (2) のように定義する。

- (2) 第 2 言語習得過程の各段階に形成された学習者の言語体系、及び学習者の可変的な言語体

系の連続体を中間言語と呼ぶ。

## 2. 分析方法

本研究の研究方法と分析手順は（3）の通りである。

### （3） a. 「ている」の習得に深く関わっている要因を解明

ロジスティック回帰分析を用いて、「ている」の習得に影響力の強い要因を明らかにする。

### b. 影響力が強いと判明された要因に注目し、横断的研究を実施

影響力が強いと判明された要因に重点を置き、横断的研究によりコレスポンデンス分析を用い、学習者の発達傾向をレベル別に検討して各習得段階の変化の特徴を把握する。

### c. 影響力が強いと判明された要因に注目し、縦断的研究を実施

影響力が強いと判明された要因に焦点を当て、縦断的研究を行い、質的な記述研究により、「ている」の習得過程と中間言語の変化のプロセスを記述する。

### d. 調査結果に基づき、横断的研究で検証

横断的研究と縦断的研究で得られた結果を検討し、「ている」の中間言語形成に関わる要因を検証することを目的として、横断的研究を実施し、データの内容に応じて統計解析を用いて結果を一般化する。

また、本研究は3つの調査方法（横断的研究2つと縦断的研究1つ）でデータを収集した。上述したように、タスクの違いにより中間言語の現れ方が異なる可能性があるという考えに基づき、多角的側面からデータを集める方法を取り入れた。少人数の被験者を対象にした縦断的研究は質的な調査方法であり、学習者の一定の期間の言語実態が観察・記述できる利点がある。一方、横断的研究は量的な調査方法であり、学習者のデータをレベル別に大量に得ることで、統計分析による客観的検定ができるため、結果を一般化することが可能である。

学習者の言語能力を測るには、言語産出能力と言語理解能力の2つの方法がある。学習者の言語能力を測るには、言語産出能力と言語理解能力の2つの方法がある。言語産出能力を測る方法としては、学習者の作文、発話などの具体的な産出データによる測定する方法がある。一方、言語理解能力を測る方法としては、与えられた資料の誤用を訂正させる方法や、文法性判断性テストにより測定する方法がある（Larsen-Freeman & Long 1991；許2005）。本研究では、言語産出能力と言語理解能力の2つの側面から調べた。具体的には、「ている」の習得過程を観察するために実施し

た横断的研究と縦断的研究では、言語産出能力を測るために、ストーリー構築法と自由作文を採用した。一方、調査結果に基づき、検証するために行った横断的研究では、言語理解能力を測るために、文法性判断性テストを用いた。

動詞の分類に関しては、本研究では「ている」の付いている動詞を状態動詞、活動動詞、達成動詞、到達動詞の4種類に分けた。学習者が使用した動詞の種類への判断に際しては、Shirai (1998) が提案したテストを用いて判断を下した。

「ている」の表わす文法的アスペクトの意味に関しては、本研究では、「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「習慣」の4つに分類した。学習者が使用した「ている」の意味に対して、筆者が下した判断の妥当性を求めるため、Smith (1997) の「2 構成要素理論 (Two Component Theory)」に基づき、Shirai (2000) が提案した理論的な枠組みで検証を行った。

### 3. 分析の結果

本研究は、日本語アスペクト形式「ている」の習得において、(1) に示した4つの課題を設定した。本節ではこれらの課題に沿って、明らかになったことをまとめた。

(1a) 「ている」の習得の難易度を左右すると考えられる要因は、どれだけ「ている」に影響を与えているのか、複数の要因を同時に検討して明らかにすること。

中国語母語話者（日本語学習歴1年の2年生と、学習歴3年の4年生、各35名）を対象に、横断調査を行い、ストーリー構築法により作文データを収集した。そして、①動詞の語彙的アスペクト（状態動詞、活動動詞、達成動詞、到達動詞）、②文法的アスペクト（「ている」の意味：「動作の持続」、「結果の状態」、「パーフェクト」、「習慣」）、③統語的環境（文中か文末か）、④時間副詞との共起の有無、⑤日本語の学習年数、の5つの要因に注目して、ロジスティック回帰分析を行い、それらの要因がどれだけ「ている」の習得過程に影響を与えているかを検討した。統計的分析の結果、学習者における「ている」の習得過程は「動詞の語彙的アスペクト」と「日本語学習年数」の2要因に左右されていることが判明した。

(1b) 「ている」の習得に深く関わっている要因は学習者の習熟度によりどう変化するかを検討すること

「ている」の習得に深く関わっている動詞の語彙的アスペクトと日本語の学習年数の2要因に焦点を当てて、正用／誤用と使用頻度の2つの側面から検討を行った。

まず、動詞の語彙的アスペクトが日本語の学習年数、正用／誤用と、どのような関係を持ってい

るかをコレスポネンシ分析を用いて考察した。その結果を図1に示した。

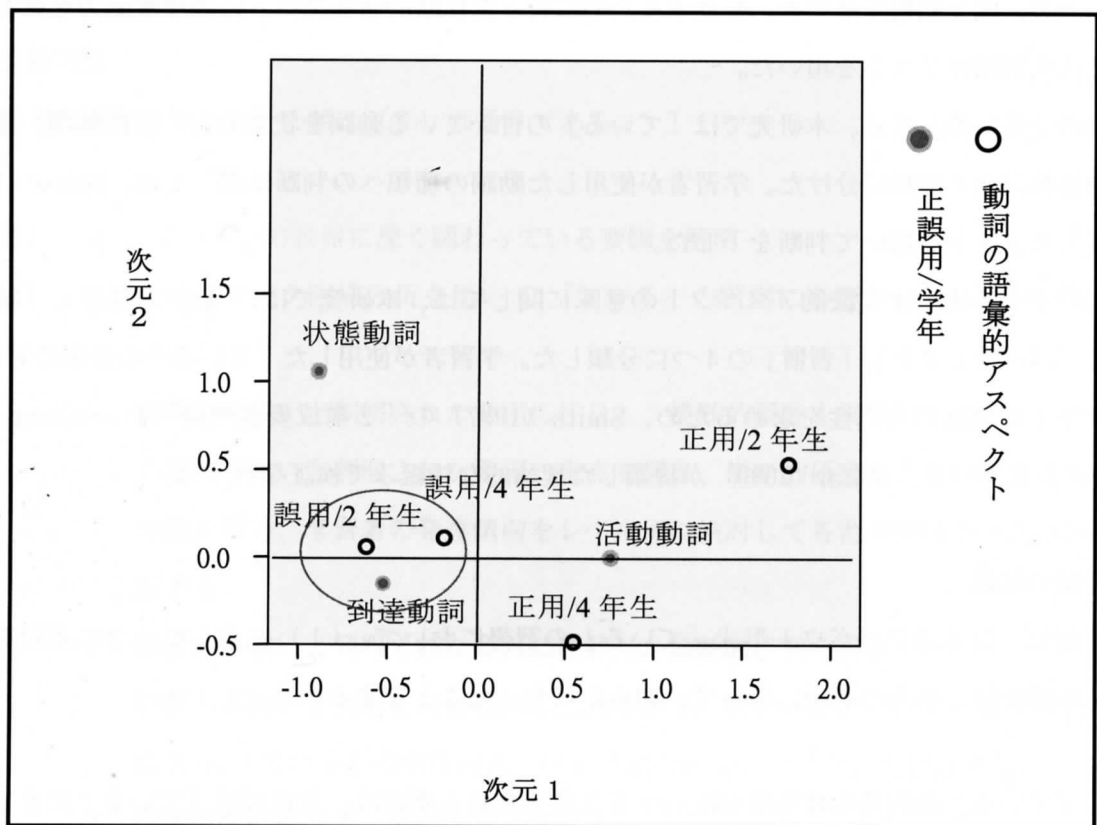


図1 学習年数と「正用/誤用」の変化

2年生（日本語学習歴1年）も4年生（日本語学習歴3年）も到達動詞に誤用が多く、到達動詞が習得しにくい項目であることが分かった。よって、「到達動詞」は学年が2年生から4年生に上がっても、依然として「ている」の誤用を引き起こす主要因であり、「ている」の習得に強い影響を与えていることが示唆された。それに対して、活動動詞の習得は進級に伴い順調に進んでいる傾向が見られた。

次に、動詞の種類と「ている」用法の組み合わせについて検討した。その結果分かったことは、活動動詞は主として「動作の持続」の「ている」に結びつくと言われているが、実際には、活動動詞に「ている」がついても常に「動作の持続」の意味になるわけではなく、「習慣」、「パーフェクト」などの用法もあるということである。同様に、達成動詞や状態動詞でも、ある動作や現象が持続中であることを示すことが可能であることが分かった（菅谷2005）。そこで、学習者が作り上げた独自の言語規則があるか、また、その言語規則は日本語レベルによって異なっているかを探るため、頻度分析を行う必要があると考える。

そこで、「動詞＋ている」の組み合わせのタイプ及び使用頻度に注目して、中国語母語話者（日本語学習歴1年の2年生と、学習歴3年の4年生、各35名）と日本語母語話者（35人）の作文デー

タを調査資料とし、被験者の使用に明確な差があるかどうか焦点を当て、コレスポンド分析で考察を行った。分析の結果は図2に示した通りである。

図2から、「動詞+ている」の組み合わせのタイプ及び使用頻度は、日本語学習者と日本語母語話者の使用に明確な差があることが分かった。即ち、2年生は「状態動詞+動作の持続」と「活動動詞+パーフェクト」を、4年生は「到達動詞+動作の持続」を、日本語母語話者は「状態動詞+パーフェクト」、「活動動詞+習慣」、「到達動詞+パーフェクト」、「到達動詞+結果の状態」を集中的に使用していることが観察された。このことから「動詞+ている」のタイプ及び使用頻度に学習レベルの差が現れたことが分かり、中間言語の発達過程が見て取れる。更に、「活動動詞+動作の持続」は図2のほぼ中央に位置しているので、3つのグループの使用傾向は似ていることを示している。この結果は、進行形「ている」は活動動詞から習得が進むというアスペクト仮説と一致しており、「活動動詞+動作の持続」は2年生と4年生のどちらにとっても、最も習得し易い用法であることを示している。

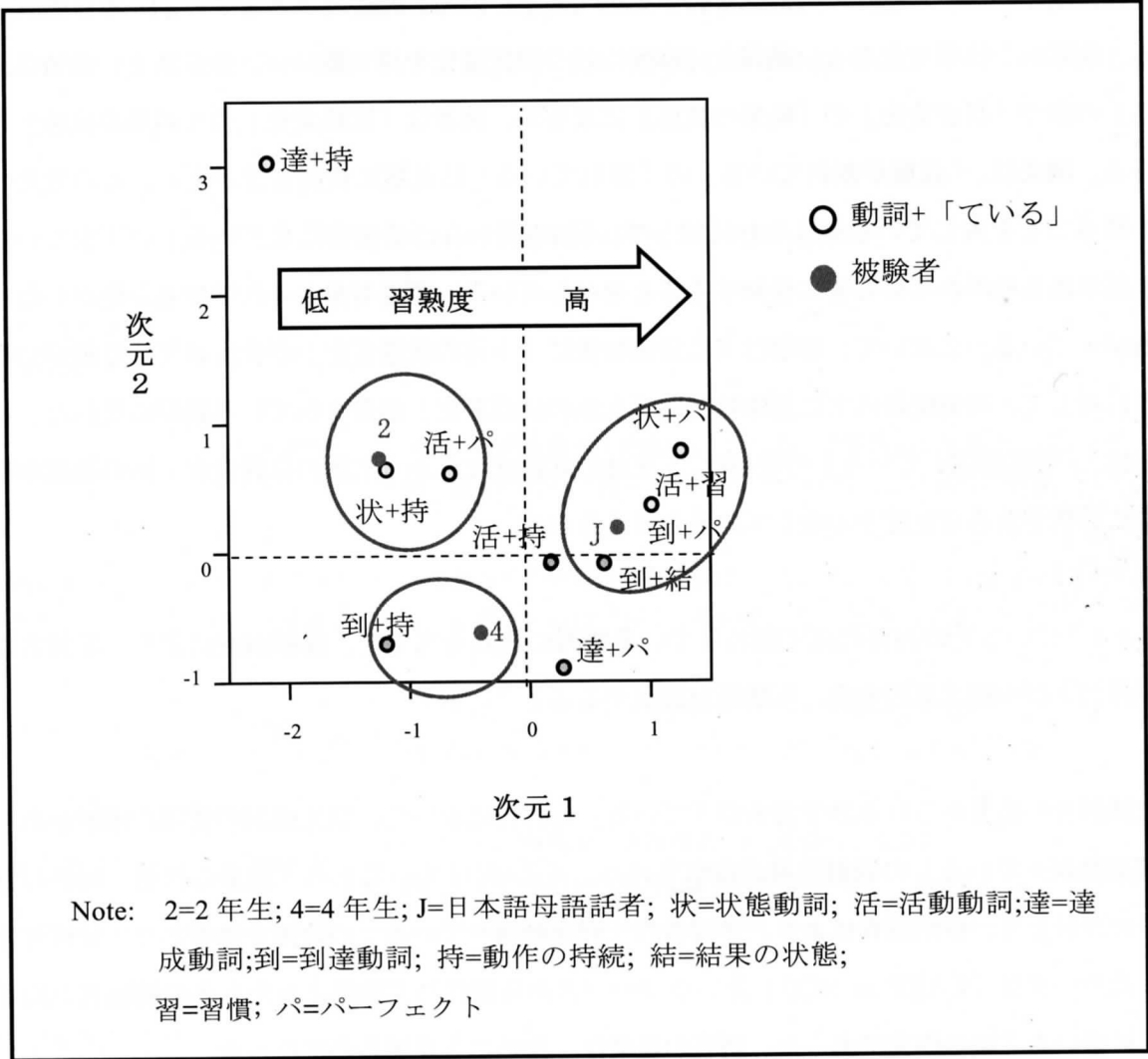


図2 習熟度と「動詞+ている」の組み合わせの関係

また、2年生の学習者において、「状態動詞＋動作の持続」の誤用が多かったことは、母語からの影響であると推測された。一方、4年生の学習者において、「た」を使用すべき「終点に至る直前の出来事」文脈に、「到達動詞＋ている」の過剰使用の頻度が高かったことが観察された。

以上で述べた動詞の語彙的アスペクトと日本語の学習年数の2要因の関係について、正用／誤用と使用頻度の2つの側面から検討を行った結果、非常に興味深い点が2つ判明した。1つは、「ている」の誤用を引き起こす大きな要因の一つに到達動詞が挙げられることである。このことは、アスペクト仮説の「進行形は、習得初期には主に活動動詞と結び付けられ、その後、到達動詞や達成動詞へと使用が広がっていく」という部分と一致している。

もう1つは、「到達動詞＋ている」の使用が動詞の意味特徴に影響されると考えられることである。「ている」の「結果の状態」の用法は「死ぬ、壊れる、割れる、行く、来る、上がる」などの瞬間性を持つ到達動詞に付くことにより現れる。しかし、「行く、来る、上がる」などの動詞は、動作・作用が瞬間的に完了する「死ぬ、割れる、壊れる」などの動詞とは異なり、空間的な移動に伴う位置変化があり、動作の方向性を持つ動詞である。即ち、到達動詞として一括される動詞の中にも、空間的な位置変化のない動詞と、移動に伴う位置変化を持つ動詞の区分がある。前者は「ている」の形で「状態変化」の「結果の状態」になるが、後者は「位置変化」の「結果の状態」に成り得る。例えば、「花瓶が割れている」の「割れている」は花瓶に状態変化が生じ、その変化の結果が残ることを表しているが、それに対して、「田中君が今、研究室に来ている」の「来ている」は主語がある場所から研究室に移動することを示している。調査対象とした学習者が使用した「到達動詞＋ている」において、正用は主に意味特徴に「主体の状態変化」が含まれている動詞に現れたのに対して、過剰使用は主に意味特徴に「主体の位置変化」が含まれている動詞に現れた。このことは、「到達動詞＋ている」の使用は、「主体の状態変化」か「主体の位置変化」かの動詞の意味特徴に影響される可能性を示唆していると考えられる。

(1c)「ている」の習得に深く関わっている要因に焦点を当てて、縦断調査により、学習者の習得過程および中間言語の変化、再構築を観察すること

横断調査の結果から日本語学習者が「ている」の習得において、到達動詞の使用に困難があり、「到達動詞＋ている」の過剰使用が観察された。そこで、「ている」の「結果の状態」用法の習得過程に注目して、縦断調査により、学習者の「到達動詞＋ている」の使用を考察した。分析対象となったデータは「LARP at SCU」というコーパスから無作為で抽出された6名の被験者が約半年ごとに書いた7回の作文であった。調査の結果は、次のことが明らかになった。

まず、「ている」の正用と誤用の推移順序について、(4)に示したように、正用は慣用的用法か



ら一般的用法に変わっていった。過剰使用のパターンの推移は、「る」から「てきた」に変化した。また、非使用のパターンは「る」から「た」に推移していった。便宜のため、以下では「ている」の誤用のパターンを表1に示したように称する。

(4) 「ている」の正用と誤用のパターンの推移順序

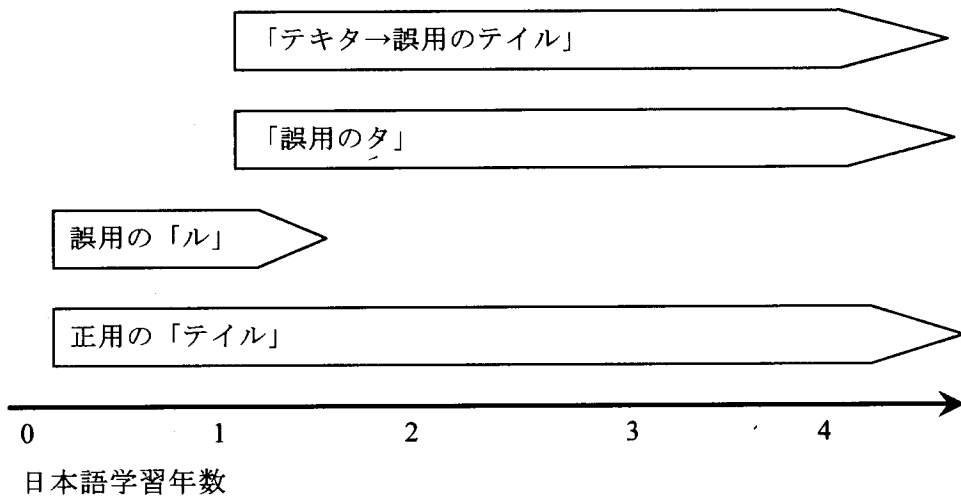
- 正用： 慣用的用法 → 一般的用法
- 過剰使用： 「る」→「てきた」
- 非使用： 「る」→「た」

次に、学習者の中間言語の変化に関しては、(5)に示したように、学習初期（日本語学習年数1年未満）に誤用の「ル」と正用の「テイル」という2つの異なる形式の使用が観察された。学習初中期（日本語学習年数2年未満）から学習後期（日本語学習年数4年未満）まで、「誤用のル」の使用が減少して、徐々に「誤用のタ」と、「テキタ→誤用のテイル」、及び正用の「テイル」という3つの形式が現れた。

表1 「ている」の誤用のパターンの呼称と定義

「ている」の誤用のパターン	呼称	定義
過剰使用の「る」	「ル→誤用のテイル」	「る」を使用すべき箇所に、「ている」を使用した誤用例：自分の店を <u>*持っていて</u> （持つこと）、これは私の夢です。
過剰使用の「てきた」	「テキタ→誤用のテイル」	「てきた」を使用すべき箇所に、「ている」を使用した誤用例：すぐ懐かしい感じが心に <u>*浮かんでいました</u> （浮かんできた）。
非使用の「る」	「誤用のル」	「ている」を使用すべき箇所に、「る」を使用した誤用例：私は今バスケットボールチームに <u>*入る</u> （入っている）。
非使用の「た」	「誤用のタ」	「ている」を使用すべき箇所に、「た」を使用した誤用例：時計に気付いたとき、もう午前1時20分に <u>*なった</u> （なっていた）。

#### (5) 学習者の中間言語の変化



まず、「テキタ→誤用のテイル」に関しては、到達動詞の性質による影響と考えられる。そこで、学習者が使用した「到達動詞+テイル」のパターンを、動詞の意味特徴に「主体の位置変化」と「主体の状態変化」とのいずれの意味が含まれているかに応じて分類した。その結果、「テキタ→誤用のテイル」が主に「主体の位置変化」の意味特徴を持っている到達動詞に起こることが明らかになった。

次に、「誤用のタ」と、「テキタ→誤用のテイル」に関しては、学習者は「誤用のタ」を使用するグループと「テキタ→誤用のテイル」を使用するグループの2つに分かれており、「誤用のタ」の使用が多い学習者は、「テキタ→誤用のテイル」が現れない傾向にあると分かった。この結果には非常に興味深い点が2点ある。1つは、「ている」の過剰使用は主に「主体の位置変化」の意味特徴を持っている到達動詞に起きることである。このことは、課題(1b)の結果と一致している。これは、学習者にとって、「主体の位置変化」と「主体の状態変化」を表す到達動詞の性質は異なっている可能性を示唆している。

もう1つは、「ている」の「結果の状態」の用法に「誤用のタ」が多いと報告されているにもかかわらず、「テキタ→誤用のテイル」も観察されていることである。更に、「誤用のタ」の使用が多い学習者には、「テキタ→誤用のテイル」が現れない傾向があった。これは、学習者がアスペクトの習得において、事態を幅のある現象と見るかどうかにより、「誤用のタ」と「テキタ→誤用のテイル」という2つの中間言語形式を再構築し、再構築の現れ方には個人差があり、そのどちらかを多用するためと考えられる。

(1d) 中間言語の形成に関する要因について、横断的研究を行い、得られた言語資料を統計分析によって検証すること

課題（1b）と（1c）では、学習者が「ている」の「結果の状態」用法を習得する過程において、結びつく到達動詞が「主体の位置変化」を表すか「主体の状態変化」を表すかという意味特徴に影響された可能性があることが観察された。そこで、「ている」の「結果の状態」用法を習得する際に「主体の位置変化」動詞と共起する場合と、「主体の状態変化」動詞と共起する場合で、習得する速度に差があるかについて、文法判断性テストで調査を行った。調査対象は台湾の大学の日本語科に在籍する中国語母語話者と、統制群としての日本の大学に在籍する日本語母語話者である。

調査の結果を図3に示した。図3は、質問文における「ている」が正用だと回答された率である。各学年の学習者の使用に、「主体の位置変化」動詞は「主体の状態変化」動詞より得点が低くなっており、動詞の種類により選択率に偏りがあったことが明らかになった。「主体の状態変化」動詞の選択率に関しては、学習期間が長くなるにつれて、どんどん増えていく。一方、「主体の位置変化」動詞の選択率は、「U字型発達曲線」が観察された。更に、「主体の位置変化」動詞において、大学院生では選択率は49%に上昇するが、3年生の「主体の状態変化」動詞の選択率と殆ど差がない数字である。

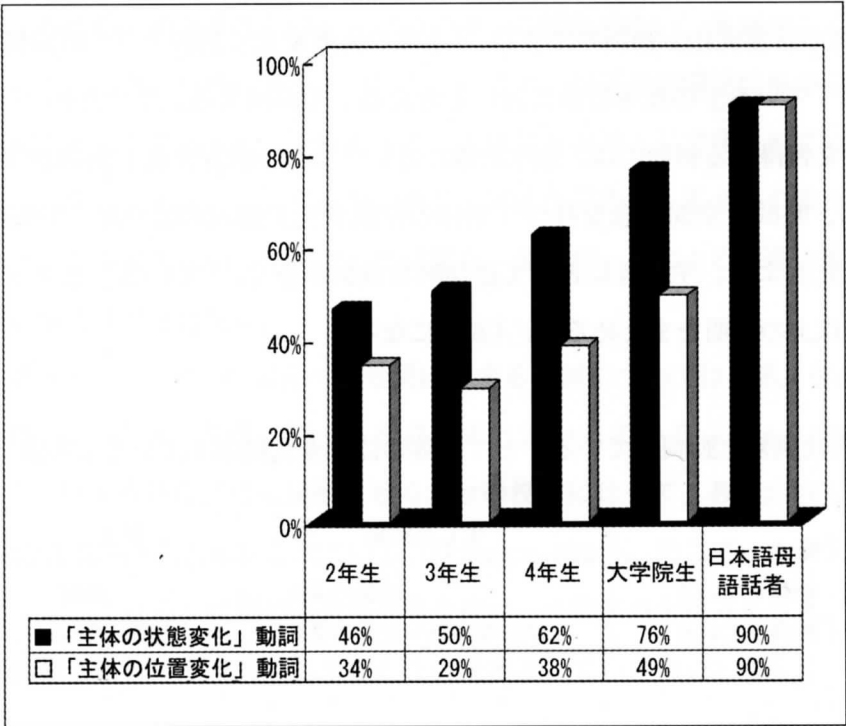


図3 「ている」が正用と判断した率

これらの結果は、学習者が「結果の状態」の「ている」を使用する時に、結びつく到達動詞が「主体の状態変化」なのか「主体の位置変化」なのかという学習者独自の規則を作り、区別して使用することを示唆している。従って、その規則の影響により「主体の位置変化」動詞の選択率が低

い可能性があると考えられる。

こうした規則がどこから来るかについて、2つの可能性が考えられる。1つの可能性は教科書からの影響である。多くの日本語教科書では、「死ぬ」や「始まる」などの「主体の状態変化」動詞のほうが先に提示される。「結果の状態」の「ている」が先に「主体の状態変化」動詞にマッピングさせるので、「主体の位置変化」動詞とマッピングしにくくなると考えられる。また、先に提示されたものが習得初期の段階から教材や先生からのインプットの頻度が高いと予測され、その結果、早い段階から使用される可能性があると考えられる。

もう1つの可能性は、「主体の状態変化」動詞と「主体の位置変化」動詞の意味特徴の違いに起因して、「主体の位置変化」動詞には「主体の状態変化」動詞より、理解するための認知的な負担が多いことが考えられる。「主体の状態変化」動詞は動作・作用が瞬間的に終わり、主体に生じた変化の結果としての「状態」が残ることを表している。しかしながら、「主体の位置変化」動詞は動作・作用が完了した時に、主体に生じたのは空間的な移動の結果の「位置」変化である。前者は「主体の状態」の変化のみを表すが、後者は空間的な移動に伴う「位置」という変化も加わっている。

従って、「主体の状態変化」動詞のほうが、「主体の位置変化」動詞より、時間概念を表す「結果の状態」用法の「ている」の意味特徴に近いと考えることが出来る。このため、「結果の状態」用法の「ている」を習得する初期には、意味特徴に近い「主体の状態変化」動詞から習得が進むと推測される。更に、時間と空間概念を持つ「主体の位置変化」動詞のほうが、時間概念のみを持つ「主体の状態変化」より、学習者にとって認知的な負担が多く、「ている」とマッピングしにくい可能性がある。以上の説明をまとめると、(6)になる。

(6) 「主体の状態変化動詞+ている」と「主体の位置変化動詞+ている」の違い

	生じた結果	概念
「主体の状態変化」動詞+ている	状態の変化	時間
「主体の位置変化」動詞+ている	空間的な移動+位置の変化	空間+時間

4. 結論と今後の課題

本研究によって、「ている」習得に関する中間言語の形成過程及び形成に関わる要因は解明された。しかし、「ている」の習得に関わる要因は多様であり、複雑であることが改めて判明し、いくつかの課題が残された。今後の課題として、以下の(7)の3点が挙げられる。

- (7) a. 学習者の中間言語に関する追跡検討  
b. 異なる母語の学習者を対象とした多様な方法による検討  
c. 教室指導が「ている」の習得への効果に関する検討

まず、学習者の中間言語に関する追跡検討については、学習者は結びつく到達動詞が「主体の状態変化」なのか「主体の位置変化」なのかという学習者独自の規則を作り、区別して使用することが確認された。この規則は教科書や先生の提示順序とインプットの頻度により形成されてきた可能性があるかと推測されたが、更なる検証を行う必要がある。

これらの課題を解明するには、1) 日本語教科書における「ている」の提示順序とインプットの量に関する調査、2) 日本語教師の発話及びインターアクションの研究、3) 教室指導を受けていない自然習得の学習者の習得過程と比較する研究、の3つが考えられる。

次に、異なる母語の学習者を対象とした多様な研究手法を用いた検討に関しては、本研究では、中国語母語話者の作文データに焦点を当て、横断的調査と縦断的調査により、「ている」に関する中間言語の変化のプロセス、再構築の過程を記述した。しかしながら、本研究の研究結果が、特定の母語話者のみが持つ個別的な特徴なのか、母語の違いに関係のない、普遍的な言語習得の過程なのかを解明することは非常に重要であると言える。そこで、母語が中国語以外の言語の学習者においても、同じ結果が得られるかどうかを検証することは研究課題として残されている。

更に、データの収集方法の違いにより結果が異なる可能性があると考えられるため、書き言葉のデータだけではなく、本研究で明らかになった結果を、発話データによる横断と縦断調査で検証することも、重要な研究課題と言える。

最後に、教室指導が「ている」の習得への効果に関する検討については、第2言語習得研究では、適切な教室指導で第2言語の習得スピードを高めると言われている (Long 1983; Pienemann 1984)。また、言語形式や目標言語に接触させるだけの授業に比べて、教材内容を工夫した授業の方が、言語習得に効果があると報告されている (Doughty 1991)。そこで、本研究の研究結果を踏まえて、これまでの「ている」に関わる教室指導を検討して問題点を探ったうえ、どのように教えることが、教室指導において効果的であるのかを今後検証していきたいと考えている。

## 論文審査結果の要旨

本博士論文は、中国語を母語とする台湾人日本語学習者にとって習得が困難な日本語のAspect形式「ている」の習得過程を、中間言語分析の観点から横断的且つ縦断的に解明したものである。データはストーリー構築法、アンケート調査と自由作文から採取した。

本論文の意義は、①アスペクト形式「ている」の習得過程に影響する可能性がある複数の要因を多変量解析の手法を用いて考察した点、②「ている」の習得過程を、台湾東呉大学の日本語専攻の学生が書いた自由作文から構成される学習者コーパスを縦断的に分析し、学習初中期～後期の「ている」の習得過程の類型化を行った点、の2点に求められる。

具体的には、「ている」のような未完了アスペクトの習得が変化を伴わない活動動詞から進むことを一般化した「アスペクト仮説」の妥当性を、動詞の語彙的アスペクトだけではなく、文法的アスペクト、時間副詞の有無、統語的環境、学習年数の影響を同時に考慮するロジスティック回帰分析で検証した結果、動詞の語彙的アスペクトが有意、学習年数が有意傾向であった。さらに、動詞の語彙的アスペクト、「ている」の文法的アスペクト、各用法（例：活動動詞＋動作の持続）の使用頻度、正用／誤用の区別、学習年数に注目してコレスポンデンス分析を行ったところ、学習後期においても、「到達動詞＋ている」の誤用が依然として多いことが分かった。以上の結果を踏まえてアンケート調査を実施した結果、特に、主体の位置変化を表す到達動詞の用例に学習者の誤用が集中する傾向が判明した。

更に、本論文は、先行仮説を一層深化させた定量的横断研究に加えて、学習者コーパスを用いて質的な縦断研究を行った点に独創性があり、学習初中期以降では「誤用のタ（ている→た）」の多い学習者と「テキタ→誤用のテイル」の多い学習者に大きく分かれること、後者の過剰使用は主体の位置変化を表す到達動詞を中心に生じていることが明らかになった。

本論文は、アスペクト形式「ている」の習得に関する先行研究と統計的手法を十分に理解した上で、先行仮説の「アスペクト仮説」の妥当性を多変量解析により再検証し、これまで未発見であった習得上の難点（「到達動詞＋ている」）を指摘した点、ストーリー構築法及びアンケート調査による定量的な横断研究と「ている」の習得研究では殆ど見られなかった質的な縦断研究を統合することで、これまで未解明の部分が多かった中国語母語話者による「ている」の習得過程の類型化とその説明を行った点は高く評価することができる。また、本論文の内容に関連して、数本にのぼる学会発表及び論文がこれまでに発表されている。

以上から、著者は自立して研究活動を遂行する上で必要な高度の研究能力と学識を有することは明らかである。よって、本論文は博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。